

琵琶湖流入河川に遡上するアユの鱗数

吉岡 剛・寺井章人

1. 目的

近年、海産アユにおいて、遡上の早い個体ほど鱗の数が多く、遡上の遅い個体は鱗が少ないことが明らかとなった。特に鱗の多い早期遡上アユは、友釣りの漁獲に大きく貢献しており、それらの増殖が急務となっている。一方、湖産アユにおいて、遡上時期と鱗数の関係は明らかとなっていない。湖産アユで同様の傾向が確認された場合、今後のアユ増殖に活用できるものと思われる。そこで、琵琶湖流入河川に遡上するアユの鱗数計数を行い、遡上時期と鱗数の関係把握および河川間の差についての検証を行った。

2. 方法

サンプルは、安曇川、知内川、塩津大川、姉川、野洲川の5河川で4～10月にかけて毎月1回捕獲したアユを用いた。各河川、時期ごとに無作為に50尾（満たない場合には全数）を抽出し、全長、体長、体重を測定し、側線上方横列鱗数の計数を行った。

側線上方横列鱗数の計数は、「アユの側線上方横列鱗数の計数マニュアル」（岐阜県河川研究所）に従い、背鰭の5番目の鰭条の基部の鱗から、鱗のつながりにそって斜め下に側線上まで計数した。

3. 結果

サンプルの体長は、4月～6月にかけてやや大型化した。6～7月にすべての河川において小型化する傾向が見られた（図1）。

側線上方横列鱗数は、全調査期間を通じて17枚～25枚（最頻値21枚）の範囲であり、既存の知見のとおり、海産アユ（13枚～24枚）に比べて多い結果となった。

側線上方横列鱗数の変化は、調査した5河川でほぼ同様の変化を示しており、地点

よりも時期によるものが大きかった。

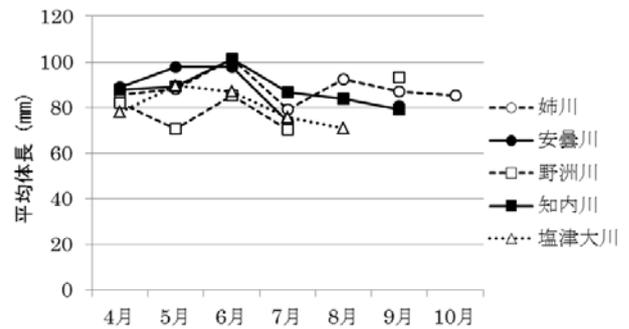


図1. 時期別の平均体長

時期別の平均側線上方横列鱗数は、4月～6月までは、21.5枚前後で推移したが、7月は20枚前後に減少し、7月以降は鱗の少ない個体の割合が高くなった。

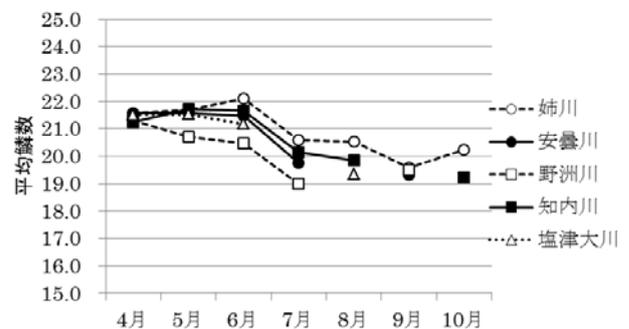


図2. 時期別の平均側線上方横列鱗数

琵琶湖流入河川に遡上するアユの側線上方横列鱗数は、海産アユのように時期とともに徐々に減少する傾向は見られず、6月～7月の間に減少することが明らかとなった。ただし、その差は、鱗数2枚程度であり、海産アユほどの変化は確認されなかった。

また、6～7月にかけて河川に遡上するアユが小型化していることから、遡上する群れが変化し、それが側線上方横列鱗数にも影響を与えたものと思われる。